

四国時報が被告川上を玉砕へ!!

〒768-0011

皆様お楽しみの号外です。悪名高い、四国タイムズ川上に因縁を付けられてから、その反撃、反論も第8号となりました。これまでの不当報道に対し、四国時報は適確かつ明解な反撃、反論をし、被告川上は客観的な証拠を全く示せず。その全て、幼稚な何の証明力も無いものばかりを「乙号証」として裁判所に提出する仕末だ。7月20日の公判において、裁判長から結審間近を窺わせる発言があり、厳正で至公至平な判決が下されるものと信じています。例によって被告川上は不出廷でした。さて、賢明な読者の皆様には、本件の推移、相方の言い分の正当性や信憑性はお解り頂けたかと存じます。事実でない事を証明する事は不可能であり、これまでの悪辣で悪質な被告の発行新聞四国タイムズを訴訟後は、証拠として裁判所に提出済です。これを一読すれば、被告川上の報道を隠れ蓑にして中傷誹謗、悪罵の限りを尽くして虚偽報道を行っているかが歴然です。本事件の判決の予測は、当然、被告川上に厳正な法の鉄槌が下されると確信しています。そのような状況の中、原告に対する世間の評論を見越して、今回、原告の度量で被告川上への「情」を暗示したにもかかわらず、又、原告の真意と判決によって被告川上は、面目を失する事の洞察をも出来ず、状況も空気も読めない被告川上は、身勝手な論法で「洞察とはカネで示談をか!」と8月5日の被告発行紙面(四国タイムズ)に記している。哀れな男である。原告に因縁を付けた昨年12月から毎月の出鱈目な内容記事のことごとくに、痛撃に反論、反証した事により、世間の皆様には、この戦況の優劣を判断されております。原告(四国時報)が被告川上(四国タイムズ)に壊滅的打撃を与え、玉砕させる事は簡単であるものの「原告もそこまで被告を追い込まなくても」と思う人々も少なからずいるのではと考へ、陥落寸前である川上砦の攻め口、四方の内の一カ所を逃げ道として空けるか、最低限の名誉を与えての降伏勧告の意を代理人を通じて与えんとした。その昔、敵に塩を贈った古事(上杉対武田)。又、兵法にある「兵を用いる道は、心を攻むるを以って上とし、武力に終るは下なり」(ここでの武力とは判決を意味する)。原告から和解交渉等と見出しにあるが、生田弁護士は次回法廷で原告に対面する時、一体どの面をさげて出て来るのであろうか楽しみだ。彼、生田弁護士は「事件は事件で…人間としてよろしく」等と嘯いていたが、本件によって、代理人を辞任するか、終わらなき全面戦争に突入するかの道しかなかったのは、気の毒な事である。この配慮を洞察出来ず、我意にこだわり、先を読めぬ程、心理的に焦り、追い詰められ、判断力を失っているようだ。俗に言う「武士の情」をかけたのだが、やはり似非サムライには通じなかったし、無用な事であった。原告は一応の機会を被告川上へ与えた。被告川上の代理人の生田弁護士との雑談の初回(6月8日)「川上さんが100%良いとは思っていない」が、依頼されたのでと個人的に述べていた。生田弁護士は、元裁判官を20余年務めた経歴、経験から、本事件の判決予想は測っておるようで、原告の含みを

観音寺市出作町 603-3

電話 0875-25-6883

編集発行人 木下俊明

感知したようであった。その際、生田弁護士へは「原告から泣きが入ったなどと間違っても勘違いさせる事の無いように」と強く念を押した(立会人あり)。対して生田弁護士も「それは十二分に解ってます。被告へは決してそのようには伝えません」との会話を交わした。にもかかわらず、8月5日の被告発行紙(四国タイムズ)の記事である。よって彼奴等には、何の情けも最早不用で、判決によって徹底的なダメージを受けさせる事になるのも、被告川上の自業自得による因果応報だ。事実でない内容に偽証罪を覚悟して証言させるなどと蔭で吹聴しておるとも聞くが、大変興味が湧いてくる。仮に誰が出て来ようが、完全に反論し論破され、法廷や世間に赤っ恥を曝すことだろう。性根を据えて出て来ることだ。被告川上は、情報や噂によれば、これまでに多くの人や企業や行政等に難癖を付け、その薄汚い手口で、聞くに耐え難い悪口雑言を書き連ね、これまでの悪行を反省すべきところ、厚顔無知、今も幼稚な行為に及ぶは、最早ミニコミ新聞社主、ましてやラストサムライ等と名乗る資格はどこにも無い。しかるに彼奴に餌付けして飼っていると噂のある「〇〇工務店」の〇〇社長とその一派では、彼等の予想に反する今後の結果に、きっと驚き彼等の川上への評価は、急落するだろうと事情通仲間で話題となっているそうである。「匹夫共が大口を叩くな!!」匹夫川上よ!汝は、長年の悪業で染み付いた、己の賤しい性根で邪論を組み立てる。それは、己自身が過去行ってきた実体験や思考からなっており、つまり、己の過去の行いの告白、自白も同然と見てとれる。原告に対するこれまでの虚言の数々を、さも事実であるかのごときにアピールに躍起となって、形振り構わず行動したものの、何一つ事実を証明出来ず、被告川上の地団駄を踏む姿が目映るようだ。賢明な読者の皆様には、原告の反撃号外1号~8号を読まれてお解りと思うが、増長していた被告川上が如何にハッタリ屋で口先だけの輩である事が解ったでしょう。本気で反撃されると、キャンキャンと犬の遠吠えだけで、少しも怖れる相手ではないですよ!今後、皆様の中で彼奴から不当な事実でない悪質な行為を受けた時は、毅然と対処しましょう。この手の輩は弱気を見せれば、それこそ彼奴等の思うツボになるのです。被告川上は、文章読解力に欠けるようだ。8月5日の四国タイムズ見出しに「木下企業舎弟の手口はマッチポンプ」と表記があるが、これも先に述べたように被告川上自身のことだよ。又、「報道を装った…云々…本性である尻尾を出さず云々…」とも表記あるが、これまた被告川上自身の裏返しで笑ってしまいましたよ。侠の人生には潔さが大切。人の心が離れるのは、それなりの理由がある。被告川上は、8月5日号に任侠道云々と論じておる。その論とは、いささか異なるご仁と親交が深いようであるが、整合性に欠けるのではないか。残念な事である。古代バビロニアの「ハムラゼの法則」にある「目には目を」。本事件は、被告川上による社会正義を装った己のミニコミ紙への危機感から原告潰しの画策に端を発し、苦心算段したシナリオで、原告に不意打ち、闇討ちを仕掛けたものの、想定外の猛反撃に戸惑い、虚言に虚言を積み重ねているに過ぎない。かつて、被告川上は世間の多数の人達を中傷誹謗し、公序良俗を乱してきた例が余りにも多く、まさに悪鬼の如し、許さぬ!!負け組の被告川上や、周りの者が「木下が川上と喧嘩したところで、川上の方が新聞ではプロやし勝ち目ない」「木下の尻尾掴んだ」等と息巻いているそうである。号外発行の度、高松方面から歯軋りが聞こえてきそうであるが、哀れで気の毒な結果は目に見えている。